

県立大生製作の震災映画 米国で上映広がる

# 被災者への共感 海を越え

東日本大震災で津波の被害を受けた岩手県陸前高田市の出身で、山梨県立大4年の菅野結花さん(21)がふるさとを記録したドキュメンタリー映画「きょうを守る」の上映が、米国内で広がっている。これまでに10大学以上で上映され、会場には菅野さんと、主題歌を提供した詩人の覚和歌子さん(山梨市出身)も訪れて現地の反応に触れた。被災地に関する報道はほとんどされないという米国で、映画は被害の大きさや被災者の思いを伝えている。〈窪田あずみ〉

映画は、菅野さんが母親や同級生、同級生の親と対話をする形式で、被災者の生の声を70分に収めた。報道で映画を知った米国・パデュー大教授でミドルベリー大日本語学校長の畑佐一味さん(56)が英語字幕を製作して米国で上映するプロジェクトを企画し、パデュー大など12校約60人の日本語を学ぶ学生が参加した。

## 学生が字幕製作

ユタ州立大で開かれた上映会には、映画の主題歌「ほしぞらとてのひらと」を作詩した覚さんも参加した。

菅野さんは、畑佐さんに招かれ6月中旬から約1カ月間渡米。全米から集まった日本語を学ぶ学生らと交流しながら2力所の上映会に参加した。

「日本語を勉強していたのに、震災のことは深く考えていなかった。気付かせてくれてありがとう」「家族に見せたい」。学生らの感想を直接聞いたことは菅野さんにとって大きな収穫だった。

観客からは「被災地がこんな状態とは思わなかった」「知ることができて良かった」という声が聞かれた。「菅野さんにしか切り取れない風景、引き出せない被災者の言葉があり、その真実が国を超えて伝わった」と覚さん。被災地を知った学生が今後、全米や世界各地に散って被災地の状況を伝えていくこと

とも期待できることから、「米国での上映の意味は大きい」と感じる。震災は過去の出来事で、復興に関して報道されることはあまりないという米国。その中で、学生たちは議論も繰り広げながら字幕を製作した。畑佐さんは「言葉の背景に思いをはせることで、震災を思い、被災者がどのような思いを持って

## 他国でも計画

映画を見た人がニュージールランドで上映を計画するなど、映画は他国へも広がり始めている。米国人学生が陸前高田市を訪問する予定もあり、菅野さんは「被災地を見ることが考えることに直結すると思うので、見てほしい」と喜ぶ。

地元・東北の新聞社に就職が内定した菅野さん。配属先はまだ決まっていないが、記者を希望している。県民と同じ目線で、生きるための情報を伝えると同時に、「記者として見聞を広められれば、日本中、世界中の人に被災地を伝えられる」。上映のたびに支えてくれる人が増えると感じながら、報道で多くの人に恩返しをしたいと、考えている。

米国での上映会に参加した菅野結花さん(右)と覚和歌子さん。日本語で主題歌を合唱する場面もあり「心を一つにできた」と覚さん。菅野さんは「映画を広めてくれる力がありがたい」と話す。甲府市内



「きょうを守る」の英語字幕を製作する学生たち。被災者がどのような思いで話しているのかも考え、表現を選んだ。米インディアナ州・パデュー大(1月)